羽田野敬雄の神葬祭実践と平田国学素描

久米　昭次郎

はじめに

羽田野敬雄の存在なくしては三河の平田国学は語れない。東三河吉田藩領羽田村の人で平田国学に心酔した。羽田野は本居大平門下であったが、後に平田篤胤に入門し三河における最初の入門者となった。精力的に入門者を増やし（九十九名）、まず神主の神葬祭の実施に尽力した。平田国学の入門者との交流は、現在の豊田市稲武地区にまで及んだ。更には、羽田野は伊那の平田国学中心地の人達との関係をも結んだ。

神葬祭とは、神主による葬儀を指すが、江戸時代はキリスト教排撃のために、幕府は仏教による宗門改制度を創設し（一六三五年頃～四三年には全国に広まる）、いずれかの仏教宗派に全員が属すことになった（寺請制度）。幕府にとって、人心掌握を兼ねたこの体制は、仏教にとっても好都合のものであった。

日本の宗教界は、仏教が伝来して百年足らずして神仏習合し、仏教が神道より上の地位を占めるようになり、神主も仏式で葬儀を行なっていた。寛政時代（一七八九～一八〇一）あたりから、仏教に対する不満が儒学者・国学者等から出てきて、平田篤胤は「神道と天皇」を「復古主義」に結び付けて理論化し多くの著書を書いた（註①、②）。それが平田国学として確立された。

羽田野は、真宗の強い西三河にも平田国学の楔を打ち、東西三河の国学情報網を形成し、また稲武地区の古橋暉兒（てるのり）の生き様を概観し、維新後の平田国学信奉者の行く末を瞥見する。

本編の構成は筆者であるが、神葬祭の骨子は鈴木源一郎

『東三河の排仏毀釈』（註①）に負う処が多い。

また羽田野が東西三河・稲武・伊那地方にまで交流した平田国学者等との交流図を文末に挙げる。

1．羽田野敬雄履歴

羽田野敬雄（一七九八～一八八二）は、上層農民の四男の生まれで幕末の神主である。文政元年（一八一八）吉田・田町神明社と羽田村八幡社神主羽田野敬道の養子になり、吉田家の許状を受ける。文政八年（一八二五）本居大平入門の二年後に平田篤胤（一七七六～一八四三）に入門した。嘉永元年（一八四八）に、平田派の同志や吉田の町人と語らい、羽田八幡宮文庫を創設した。さらに明治元年（一八六八）禁裏守護のために上京、「五箇条の誓文」発表の際には、周辺を護衛した。同年十二月皇学所講官に任命され、『万歳書留控』（註③）、『三河国古蹟考』、歌集など多数の著作がある（註「大事典」）。

2．平田国学者の思想的視野

国学者は、敵視している外国の文物に押なべて敬遠する傾向があるというが、羽田野は『栄樹園類集』の中で「異国船之部」「海防之部」「黒船関係」の各収集項目があり、その数百三十件以上の海外情報の掲載がある（天田晴大「羽田野敬雄の海外認識について」『三河地域史研究』第十九号　二〇〇一年）。羽田野に限らず、西三河の村上忠順も、『天保集』、『弘化記』、『嘉永記』など六冊子があり、幕末の内外情報を記録したものである（後にこれらは、村瀬正章の編集・校訂によって、『村上忠順記録集成』としてまとめられている（文献出版　一九九七年）。さらに、これこそ傑作だが、平田篤胤でさえ、憎悪の耶蘇教の神学を採り入れ自分の理論構築をしている（註②）。このようにみると、平田系国学の実践を目指す人達は海外の動向にも敏感であったと言える。

3．羽田野敬雄の平田篤胤入門の動機

羽田野が平田門に入った文政十年（一八二七）頃といえば、外国船が日本に来航し異国船打払令が出るなど、内外問題による危機が深刻になりつつあった。従って、彼は「神に仕える職業とし誠の道に生きることを本願とする限り、本居学の探求のみでは現実社会に対応することは可能にならないと判断して平田門に入った。」（註①）。吉田領内にはすでに明和年代（一七六四～七二）から、国学を究めようと本居宣長に入門し研鑽に努めている人達もいた。藩には国学の土壌が醸成されていたといえる。宣長・大平の

説く「神の道、天皇の道を素直に受け入れることこそ人間最高の道」(註①)とする理念に対して、篤胤は「国学は祖先の蔡祀を重視し、孝道即神代の神々への崇敬であり、天皇への忠であると復古主義の立場で国学を論じ実践を強調した」(註①)。文政六年(一八二三)篤胤が吉田神祇管領家配下の神職の教授を命じられてより、神主入門者が際立って増加してゆき、時には大平自身が篤胤入門希望者の紹介者となることもあった(註①)という。平田国学は羽田野にとって神主として大きな行動指針となる学問であった。

4. 平田派の三河地方へのオルグ

羽田野敬雄が平田門に入ってより平田との交渉は頻繁になり、天保二年(一八三一)四月には、篤胤は養子鋏胤(一七九九~一八八〇)を三河へのオルグ(運動を組織拡大し、連絡・調整にあたったりすること)として派遣した。同年五月八日には、羽田野家を訪れて神職らと遭い草鹿砥宣隆を訪ね、渡辺政香に会い、羽田野は東西三河の神主達を紹介した。その後、鉄胤は伊勢に参拝し、伊勢の帰途、吉田城内天王社で十数人の神職を前に「玉襷」などを講義した(註④)。「この旅行によって、神職を主とする三河の平田国学の広がりの基礎が作られた」(註④)と田崎氏は論述している。

5. 神葬祭の資料収集

平田一行の三河オルグ前の文政十年(一八二七)、平田門下の羽田野、草鹿砥ら一部の神職は、「身潔講」の設立を機に、水戸・勢州などで行われていた神道家の離檀、神葬祭の施行を領内においても実践しようと資料収集を開始した。吉田管領頂上家文書にも見えるというが、甲斐国中一統・松代領・桑名領など十三の国領の神職は、寛政の頃(一七八九~一八〇〇)から、近くは遠江国引佐郷神宮寺村の謂伊神社神主の山本河内など四人の神主が文化三年から六年(一八〇六~〇九)にかけ神葬祭を実施している。更には、「東照神君(徳川家康)が久能山に葬られた時、神祇管領吉田家が導師となり、神葬祭を執行し没後の神君は仏号をしなかった」。また、さらに天保九年(一八三八)羽田野の養父敬道の葬儀に際しても埋葬祭のみ仏式とし、その外を神式で行なったという(註①)。

気鋭の国学者伴信友に、羽田野が神葬祭についての可否を尋ねたところ、信友から「布施を葬用に当て力の及ぶ限り丁寧にすべきであり、将来には寺は廃され、すべて神社になるべきだ」(註①付録)と、返書が届いた。この返答に羽田野等は離檀・神葬祭の重要性に確信を深めたことであろう。

6．神主の神葬祭

吉田領内神主八名の離檀神葬祭実施願は、草鹿砥家の離檀成立の、二年後の安政三年（一八五六）十一月より始まり翌年の六月神葬祭許可となった。草鹿砥家に比較した時、実に短期日の決着であったが、理由として既に「草鹿砥家と妙厳寺（豊川稲荷）との掛け合いが先鞭をつけた」（註①）ということがあり「離檀者が一糸乱れず檀那寺との掛け合いに金銭提示で臨んだ」ことで切り抜けられた。確かに離檀者への風当たりは檀那寺のみでなく、檀徒が反発して寺の境内墓地から締め出しを図ったが、その締め出しも離檀者個人が、「金七両弐分御施入」することで「万事決着」となった（註①）。

羽田八幡宮文庫が嘉永元年（一八四七）に創設され、神主以外の富裕町人にも募金を実施し、それにともない平田国学の講話会が盛大に開催されるようになった。これも神葬祭運動の気運を支援したということである。嘉永五年（一八五二）の羽田野敬雄の『萬歳書留控』には、吉田藩のふたりの家老は、神社側に好意を示し、暗に「神仏は分離すべき」と公然と述べた（註①）。羽田野にとっては、嬉しい言葉であっただろうし、神葬祭実践に確信が持てる言葉であったに違いない。

7．氏子が神道に改宗へ

吉田藩の神社氏子の神葬祭が集落で実施できたのは、明治になってからのことである。明治八年（一八七五）高塚集落は、全村挙げて神道に改宗した。集落単位で行われていた地蔵尊祭りや庚申講も般若心経読誦の仏式を避け、「三条の教則」の遵守を説き、「熱田講社」を結成し規約を設け村是とした（註①）。

もう一例を挙げる。維新期山吉田村は集落全員の離檀となった。そのため寺は次々と破却された。三一五戸の家が離檀した。ところが、明治十一年（一八七八）初代内務卿大久保利通の「転宗自在の達」が出ると、満光寺などの寺に、百戸以上が仏教への転宗願を出した。明治十五年（一八八二）頃に、また神葬祭に帰る人もあり、その後仏教に帰る人も出るなど（註①）動揺を繰り返した。

8．古橋暉兒の神仏分離運動と神葬祭

古橋家は、美濃国中津川の出身で、享保二年（一七一七）に義次の代に稲橋村に移り、酒造業などを営む庄屋であったが、維新後は村落内の住民の殖産興業による自力更生、地域振興をリードした。

豊田稲武地区の稲橋村の神葬祭運動は明治三年

（一八七〇）頃より明治八年（一八七五）にかけて行なわれた。運動の主導者は稲橋村の平田篤胤没後入門の古橋暉兒（のり）であった。明治元年暉兒は自ら新政府へ恭順を誓い、八月二十二日に三河県捕亡方（ほもうかた）御用を買って出たのをはじめ維新政府の出先役人として足助・岡崎・新城などに出仕し、二年一月には、聴訴・商法・酒造係を拝命し、九月には伊那県の三等庶務足助局詰となった。そして翌三年七月には権少属へと昇進した（註①）。

ところが三年暮れに伊那県騒動（足助に庁舎）といわれる騒動が、設楽・八名・宝飯三郡の百姓数千人が立ち上がる一揆が起った。暉兒は明治維新に大きな期待を寄せていたが、政府の実体が自らの理想とかけ離れてゆくにつれ、政府への絶望を感じるようになり、明治五年（一八七二）末に公職を退いた（註⑤）。

一方、暉兒は多事の中でも平田国学の本分を忘れず、明治三年に他村に先駆けて神仏分離を呼掛け断行した。そして明治四年（一八七一）郷社制度の布達とともに郷社八幡宮の神官となり、十二ケ村の神仏分離をほぼ軌道に乗せた（註①）。古橋暉兒の平田国学実践は、村民殖産とのタイアップで行うということで（註⑥）、地域特性を上手に利用する方法をとった。それが平田国学の実践の特性でもあった（註⑥）。

9．伊那の平田国学者群像

師平田篤胤の著作を出版しようと「上木運動」（図書を版木に彫り出版すること）が起ったのは長野伊那地方である。なぜ平田国学が伊那地方に芽吹いたのか。この地は『新葉和歌集』の撰者として知られる宗良親王（後醍醐天皇の皇子。一三一一～八五・八・十？）（註「広辞典」）の終焉地とされている。また平安時代より官道が整備され駅伝制度が実施され、文化・人事交流が盛んで学問を受容する土壌があった（註⑦）。

伊那の地方史研究家の市村咸人（みなひと）によれば、師篤胤の著作の出版の中心になった岩崎長世は甲府の人で、平田篤胤直門で、長く江戸にいて皇学を修め和歌を良くし能楽に堪能であった。伊那の志士は能や和歌の会を名目とし長世の元に集まった。席上、時事を談じ大義名分を語り感慨を和歌に寄せ、徳川幕府の横暴を論じ皇室が衰えたことを嘆いた。そして、長世は伊那に住むこと十二年、平田学の宣伝を当局が監視するところとなり、文久三年（一八六三）に伊那を去って京都に行き、白河家（伯家神道）の学士職の補助となった（註⑦）。

さらに伊那の国学で忘れられないのは、島崎藤村の父・正樹と小説『夜明け前』の主人公青山半蔵であろう。明治維新後の国学の行く末を暗示する「藤村の小説」をやや長

いが引用したい。

「彼（青山半蔵＝引用者）の行為が罪に問われようとして東京裁判所の役人の前に立たされた時、彼の僅かに申し立てたのは、かねて耶蘇教の蔓延を憂ひ、そのための献言を仕りたい所存であったところ、たまたま御通輦を拝して憂国の情が一時に胸に差し迫ったといふことであった。ちやうど所持の扇子に自作の和歌一首しるしつけて罷り在ったから、御先乗とのみ心得た第一の御車をめがけて直ちにその扇子を捧げたなら、自然と帝の御目にとまり、国民教化を打ち建てる上に一層の御英断を相立つべきかと心得たといふことであった。」

「神道をわが国の根本とし、儒仏を枝葉とすることは、神祇局以来の一大方針で、耶蘇教たりともこの根本を保全するが道であるといふ風に半蔵等は考へた。ところが外国宣教師は種々な異議を申立て、容易にこの方針に従わない。それに力を得た真宗の僧侶までが勝手に主張しはじめ、独立で布教に従事するものを生じて来た。」

（『島崎藤村集』（二）十二章　現代日本文学大系十四　筑摩書房　一九七〇年）。

この二段落は、扇献事件と言われる事件を起こし、東京裁判所で尋問を受けた際、胸のうちの想いを表白したものである。小説「半蔵伝」と平田国学信奉者「島崎正樹伝」とは、かなりな部分は共有するが、小説『夜明け前』は「正樹伝」ではない。だが、この扇献事件は「正樹伝」である(註⑧)。

島崎正樹は篤胤没後門人となり常に敬神尊王の大義を唱え、維新後、戸長および学事掛となり、明治八年（一八七五）飛騨国郷社水無神社宮司に任じられた。彼の行動は、ア．太陽暦の頒布のとき皇国暦を作れと迫り、イ．洋算を学校で教えるのをみて和洋兼修を主張し、ウ．教科書の中の「日本人は蒙古人種」と知ると国体の尊厳を害する、といって提訴しようとした(註⑦「人物略志」)。これが島崎正樹の実像という。

彼の絶筆の一部、「憂国の想い抑えがたく、悲憤慷慨も涙を流す志士たる我を、人は狂人としか見てくれぬ。何と悲しい事ではないか。」（書下し文は北小路健、註⑧）。明治十九年（一八八六）十一月死去、行年五十六歳であった。

まとめに代えて

「羽田野敬雄と古橋暉兒の神葬祭の実践は、地域や文化風土により異なっている」(註⑥)ことが特色という。東三河の吉田藩は七万石の城下町であり、文庫作りなど文化面からも平田国学を普及させ神葬祭への気運を高めた。古橋の先導した稲武地区は殖産興業で村民の生活向上を図り、神葬祭に対する農民の抵抗は表向きなかったように感じられる。

平田国学入門者は、武士・神主・農村の上層民・豪商など、世の中に対する問題意識を持った人々であったが、新政府が初期段階で平田国学思想の人々を排除したのは、複雑多岐な明治維新の社会状況の中で、一つその要因を敢えて挙げるとすれば、彼等が国家建設の展望を持たなかったからであろうか。外国に対する状況把握はしていたが、偏狭な尊攘思想から抜け出せなかった。

気になるのは草莽といわれる在野の尊王攘夷活動家は何処へ行ったのだろうか。やや特殊な例になるが、古橋に匿われた佐藤清臣を紹介したい（註⑨）。

「草莽の志士清臣は慶応三年（一八六七）王政復古の大号令が発布されたことを知る。相楽総三らは西郷隆盛の指令を受けた官軍赤報隊（幕軍討伐）に参加し、清臣は偵察の任につく。相楽総三らは、年貢軽減策を建白し年貢半減令布告を許されたが、一月下旬新政府の政策転換に伴い、赤報隊は京都に呼び戻し指令を受けるが、信濃地方まで来ていた相良赤報隊は引き返さなかった。官軍総督府（岩倉具視の息子）は、赤報隊が「偽官軍」であることを回章（廻覧）で知らせ、総三ら赤報隊が逮捕処刑された。難を逃れた清臣は、羽田野の紹介で暉兒の元に身をよせた。その後の清臣は、基督教排撃と神道の地位回復のために全国神官運動への活動が主になった。」（抜粋、註⑨）

さて、国学者平田篤胤・鉄胤は順調に入門者を拡大したが（篤胤門人は五百名、鉄胤の時代は五千名）（註①）、明治四年（一八七一）には神祇官も神祇省に改められ、それも廃止されて教部省に吸収され、さらに内務省の神社局に移管された（註「大事典」）。これは国学者の排除を意味した。

平田国学は社人のアイデンティティを触発し、神葬祭を展開し神仏分離を誘発し、さらには尊攘思想に結びついた。しかし、明治の初期段階には、表向き平田思想は排除されはしたが、天皇制と結びついた「神道」は、「国教化」し、平田国学の命脈を保ったといえる。その後の平田国学信奉者の行方は今後の検討課題である。

〈参考文献　および　註〉

＊カシオ電子辞書『日本歴史大事典』「大事典」（小学館）

＊『日本史広辞典』「広辞典」編集委員会　山川出版社　一九九七年

＊『新詳日本史図説』「年表」代表者・浜島正昭　浜島書店　一九九五年

①　鈴木源一郎『東三河の排仏毀釈』豊橋地方史研究会　豊川堂　一九七七年

②　石田一郎「本教外編上」（校訂・訳・註）日本の思想『神道思想集』筑摩書房　一九七〇年

上下両巻とも一八〇六年篤胤三一歳の著作で、彼の主著と目されている『古道大意』『俗神大意』『霊能真柱』『古史成文』『古史伝』

『玉襷』全てが『本教外編』述作以降に著されている。彼の神道思想は完全に基督教思想の影響がある。篤胤は基督教の影響をうけて主宰神の観念と来世の思想とを強調した。

③ 羽田野敬雄『萬歳書留控』（『幕末三河国神主記録』所収　羽田野敬雄研究会編　清文堂　一九九四年）

④ 田崎哲郎「天保二年　平田銕胤（鉄胤）『三州行日記（仮題）』及び人物注釈」国立歴史博物館研究報告　宮地正人編　二〇〇六年

⑤ 布川清司「伊那県騒動」『近世民衆の倫理的エネルギー　濃尾・尾三の思想と行動』風媒社　一九七六年

⑥ 山中芳和『幕末期国学の地域における展開―三河地方における羽田野敬雄の活動を中心に―』基盤研究C論文の二点に注目。国学運動は「それぞれの地域での具体的な生活の営みと対応しながら展開する形をとった」（松本三之介　解説「幕末国学の思想史的意義」日本思想体系『国学運動の思想』岩波書店　一九七一年）。二点目は、山中論文に「第九節　文庫と出版　（二）尾三の文庫」の項があり、愛知県の近世の「文庫づくり」と文庫の盛衰の紹介は示唆を与える。三河は、戦争による焼失・散逸が少なく継承の意義は大きいといえる。（『愛知県教育史』第二巻　愛知県教育委員会　一九七二年）。

⑦ 市村咸人（みなひと）「『伊那尊王思想史』国書刊行会　昭和四八年（昭和四年復刻原本）

⑧ 北小路健「『夜明け前』探求　伊那路の文献」明治書院　一九七四年

⑨ 大濱徹也「佐藤清臣小伝―ある草莽の生涯をめぐって―」芳賀登編『豪農古橋家の研究』雄山閣一九七八年

羽田野敬雄と神主・国学者等交流図

木曽馬籠

島崎藤村『夜明け前』の世界
島崎正樹（重寛）篤胤没後門人
太陽暦の頒布に皇国暦を迫る等

⟺

長野伊那国学

間秀矩（島崎正樹の師、篤胤没後入門）
・平田篤胤の著作の上木運動が岩崎長世らの発起で始められる
＊（下段）

↑ 5名の上木支援

中津川より稲武へ

古橋暉兒（てるのり）（1813～92）
篤胤没後入門、尊王攘夷運動援助
農談会を組織＝質素貯蓄の励行
村民に養蚕・製茶・林業を勧める
全村神葬祭、廃仏毀釈運動を展開
加茂郡岡崎郷社神官となる
・「加茂騒動」（1836年）の古橋支配領内に入るのを阻止

盟友 ⟺

東三河・吉田

羽田野敬雄（1798～1882）
三河の平田派中心人物
多くの入門者を勧誘
神葬祭の推進、皇学所教授拝命
・1848年に町人と羽田文庫創設
大国隆正が訪れ公開性に触れる
吉田神明社、羽田八幡社神主

⟺ 深い交流

西三河・西尾寺津

渡辺政香（まさか）（1776～1840）
八幡宮神主、白河家入門
『伯卜（はくぼく）論書』を著す
『鴨の騒立』を著す
三河初の寺津八幡文庫作る
地誌『三河志』を著す

⇕ 盟友

東三河・宝飯郡豊川

草鹿砥宣隆（くさかとのぶたか）（1818～69）
三河一宮神主、篤胤門人
羽田野と共に皇学所講官拝命
・曹洞宗妙厳寺（豊川稲荷）との離檀に成功（1854年）

盟友 ↘

西三河・豊田高岡

村上忠順（ただまさ）（1812～94）
刈谷藩典医、国学者、歌人
本居内遠・植松茂岳らに師事
『三河雑鈔』を著す
村上文庫創設
勤皇の志士との交流

↕ 師弟

＊伊那の女性国学者；松尾多勢子（たせこ）

6男4女を養育したあと鉄胤入門
1861年より京都で攘夷運動
攘夷派同志を匿う
・江戸に出て岩倉具視家に出入り、息子を戊辰戦争に従軍させる

西三河・岡崎

深見篤敬（あつよし）（1827～81）
深見家に婿入り、忠順の娘を娶る
木綿業で菊間藩准御用達、陣屋役人
平田門人、尊王攘夷運動に参加
陣屋教諭使・賢立（真宗）との軋轢
岳父らの著作物出版に協力

盟友 ↘

西三河・岡崎

竹尾正胤（1833～74）
額田郡山中村・舞木八幡宮神主
羽田野・草鹿砥らと神官の組織作り
『大帝国論』は国学者の世界観を示す

↓ 菊間藩大濱陣屋（服部純少参事）
↓
「三河大浜騒動」（明治4年3月8日～10日）

（くめ　しょうじろう）